築地市場の移転を巡る特別な祭の実現とその葛藤

――平成27年つきじ獅子祭を通じた考察――

池畠紗彩

本修士論文は、平成27年の「つきじ獅子祭」において、東京都中央区築地に位置する波除稲荷神社と、築地市場内に位置する魚河岸水神社（以下水神社）との合同の神輿の渡御がなぜ実現したのかということを明らかにすることを目的としている。つきじ獅子祭とは、波除稲荷神社が毎年6月に執り行っている、約３５０年の歴史を有する祭である。平成27年のつきじ獅子祭は、翌年の築地市場の豊洲への移転を控え、市場の守り神である水神社の神輿との合同の渡御が行われたが、それは長い歴史の中で初めてのことであった。そもそも両者は異なる神を祀っており、氏子も異なる。では、なぜこのような合同の渡御が実現し得たのだろうか。本論文においては、その実現の理由と背景にある様々な葛藤を、文献、祭当日のフィールドワーク、インタビューにより考察している。

第1章では先行研究を概観し、問題の所在と本論文の意義を提示している。

第1節では、本論文で対象とした築地に関する研究、祭りの研究、さらにアイデンティティに関する先行研究を概観している。

まず、築地に関する研究では、これまで人類学的な視点での記述は不足しており、かつ築地市場中心のものであった。さらに市場の移転問題も、土壌汚染や市場関係者の視点からの研究が中心となってきた。

次に、祭りに関する先行研究を概観している。ここでは主に、都市人類学における都市と祭りの研究について扱った。特に近年では、これまでの祭礼研究において不足してきた具体的な個人の生活実践に注目し、文化の動態に迫った研究も行われていることに注目している[1]。

そして、本論文の分析において言及した、アイデンティティに関する議論を概観した。ここでは主に、祭りとアイデンティティの議論を扱っているが、その中でも特に、祭りの機能として自己のアイデンティティを確認することを指摘した、森田三郎の研究を取り上げている。さらに、祭りを考える際に、日常のレベルと非日常のレベルに分けて考えていくことが重要であると指摘していることに注目した[2]。

第2節では、本論文の目的と意義を３つ提示した。第一に、これまで不足していた、築地の町で市場と共に生きてきた人々を中心に据えた人類学的な研究を行った点である。第二に、これまでの祭り研究で不足していた、実際に祭りに関わる人々の語りに注目した分析を行った点である。第三に、築地市場の移転前に市場と共に行った一度限りの、最後の祭の姿を記したという点である。

第2章では研究対象についてそれぞれ概要を示した。

第1節では、築地という場所を扱った。重要な点は、築地の埋め立ては明暦３（１６５７）年の明暦大火後に行われたということである。そして、関東大震災後に日本橋から市場が移転した。

第2節ではつきじ獅子祭と波除稲荷神社について述べた。波除稲荷神社は築地市場に隣接しており、つきじ獅子祭は、毎年6月10日を大祭日とし開催されている夏越し大祭である。現在波除稲荷神社は３つの神輿を有し、５つの町会で成り立っている。

第3節では水神社を扱った。水神社は東京都千代田区にある神田明神の末社であるが、築地市場内には遥拝所がある。この遥拝所は日本橋からの市場の移転とともに建立された。さらに、水神社は独自の祭である水神祭も不定期だが執り行ってきた。そのような水神祭を支えてきた組織に魚河岸会がある。

第4節では、築地市場を扱った。築地市場は東京都中央卸売市場の1つである。「築地といえば東京の魚市場、東京の魚市場といえば築地なのである(3)」と指摘されることもあるように、「築地」という言葉は単なる土地の名を越え、「築地市場」を指すようになっている。さらに、築地市場は平成28年には豊洲への移転が予定されている。

第3章では、本論文において行った祭当日のフィールドワークとインタビュー調査、文献調査で得られたデータを記述している。平成27年のつきじ獅子祭は、6月10日（水）から14日（日）の5日間にわたり執り行われ、水神社との合同の神輿の渡御は、6月13日（土）に行われた。本論文において行ったインタビューは、魚河岸会（2名）、波除稲荷神社禰宜、波除稲荷神社氏子（4名）である。

第4章では、第2章と第3章をもとに分析を行った。

第1節では、築地という土地の複雑さを分析した。波除稲荷神社は築地の埋め立てと共に建てられたが、日本橋から市場が移転し、市場の人々が祀っていた水神社の遥拝所を建てたことにより、波除稲荷神社の氏子範囲に別の神社が存在するという状況になった。そして、市場の人々はそのまま水神社の氏子であったため、市場の土地は波除稲荷神社の氏子地域でありながら、氏子ではないという状態になった。

第2節では、波除稲荷神社とつきじ獅子祭の特徴を分析した。波除稲荷神社側は現在の状況に関して複雑で矛盾するような思いを抱えており、両者は他者である一方、全く別物ではないと考えていることが分かった。さらに市場に対する思いと祭や水神社に対する思いは等しくはなかった。

第3節では、水神社と水神祭の特徴を分析した。水神社と魚河岸会にとっては、築地よりも神田明神や日本橋に対する強い思いがある一方、それぞれに対する複雑な思いを抱いていた。

第4節では、平成27年のつきじ獅子祭の実現の背景を分析した。実現のそもそものきっかけには、築地市場の豊洲への移転があげられているが、合同の渡御の構想は少なくとも10年以上前からあり、今回の祭は波除稲荷神社側からの打診であったことが分かった。また、実現においては両者の交渉の中で、それぞれが不安や悩みを抱え選択を行っていた。

第5節では、波除稲荷神社の禰宜とその氏子らの築地という土地に対する思いを明らかにした。波除稲荷神社側にとって、市場に対する思いと水神社に対する思いは同じではない。祭や神社同士の関係性においては、両者は他者であった。しかし、市場とそこで働く人々とは、築地の一部として、あるいは築地の中心的な存在として共に生きてきたのである。

第5章では、平成27年のつきじ獅子祭において、水神社との合同の神輿の渡御がなぜ行われたのか、という問いに対する考察を行った。

第1節では、アイデンティティに注目した議論を行った。今回の祭の実現の背景では、波除稲荷神社側も水神社側もそれぞれが様々な葛藤を抱えていたが、それでも今回の祭が実現した理由には、第一に、市場の豊洲への移転があった。しかし、それが理由の全てではない。そこには、築地という土地の複雑さに由来する、波除稲荷神社と水神社、両者が抱えるアイデンティティに関わる理由があったと考える。

森田は、祭りにはアイデンティティの確認欲求に応える機能があり、祭

りを通じて人々は自らのアイデンティティを確認すると指摘した[4]。市場が日本橋から移転して以降、波除稲荷神社の氏子範囲に水神社という他の神が存在する状況になったが、それをあるべき姿ではないと感じていたのは、波除稲荷神社側であった。

そもそも氏子はウチとソトという区別において氏子集団が規定され、さらに氏子制度が地元のアイデンティティを確認するのに役立っている[5]と指摘される。そのため、水神社というソトの集団により、それまでつきじ獅子祭を通じて確認されていたウチのアイデンティティが、確認できなくなったと言える。同時に、波除稲荷神社側が市場に対して日常のレベルで抱く思いは、水神社に対するそれとは別物であった。波除稲荷神社の氏子らにとって、水神社によって祭において確認されるアイデンティティが複雑にされたが、それでも現在、市場は身近なものである。そのため、水神社と市場は等しい存在ではない。そして、これは波除稲荷神社側にとっての理由であり、波除稲荷神社側からの打診で行う必要があったのだ。

第2節では、具体的な両者の選択に着目し、考察を行った。特に、なぜ共に神輿の渡御を行う必要があったのかという点であるが、それは、両者は日常のレベルにおいては共通のアイデンティティを有しているものの、祭においては別物であることを認識していたため、別物同士が神輿というそれぞれの象徴を共に担ぐことが重要であったからだと言える。そうした矛盾を矛盾したまま抱えているのが現在の築地であり、現実の姿と重なるからである。同時に、水神社側も、日常のレベルでは共に築地で生きてきたという実感を抱いており、今回の祭では日本橋よりも築地に対する思いが強まった。このように、今回の祭の実現は市場の移転が全ての理由ではなく、アイデンティティに関わる問題が背景にあったと言えるが、それでも祭において異なるアイデンティティを確認していた両者を最終的につないだのは、市場の豊洲への移転であった。

第3節では、築地という場所で生きるということについて述べた。波除稲荷神社とその氏子らにとっても、豊洲への市場の移転は重大な問題である。しかし、彼らにとって市場は築地の全てではない。築地はこれまでも様々な変化を経験してきた土地であり、氏子ら自身が変化と向き合っていく姿勢を持ち合わせている。そのような人々がいる限り、築地市場が移転しても、築地はこれからも続くのである。

注

(1) 中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学―記憶・場所・身体―』(古今書院、2007年)。

(2) 森田三郎『祭りの文化人類学』(世界思想社、1990年)。

(3) ベスター、テオドル(Bestor, Theodore C)『築地』(和波雅子・福岡伸一訳)(木楽舎、2007(2004)年)、62頁(*Tsukiji: the fish market at the center of the world*. Barkeley: University of California Press.)。

(4) 注(2)森田氏同著書。

(5) 注(3)ベスター氏同著書。

ストラスブール、ノイシュタットへの世界遺産エリア拡大プロジェクトにみえる課題

――受容へと向かう潮流と登録後の問題――

黒　田　真　平

本修士論文の目的は、フランス、ストラスブール（Strasbourg）の世界遺産について、１９８８年に世界遺産に登録されたストラスブールの旧市街にあたるグランディル（Grand-île）から、１８７１年から１９１８年のアルザス（Alsace）のドイツ併合の間にドイツによって建設された新市街であるノイシュタット（Neustadt）まで、世界遺産の登録範囲を拡大しようというプロジェクトが、市、住民双方から歓迎され、進められるという一連の大きな流れになる中で、それぞれの立場の思惑の違いから生じうる登録後の問題を考察するということである。

この目的を達成するため、先行研究、文献から得たデータをもとに、まず仮説を立てる。それは市の責任者や市の専門家によるノイシュタットに関わる言説が、市によって行われるディスカッション、説明会、教育の場を通して人々に伝わり、ノイシュタットの世界遺産登録への全員賛成という同一の意見、同一の流れを作り出しているのではないかと言う仮説である。フーコーの言説をめぐる理論が枠組みとなっているこの仮説の検証を２０１５年1月から3月の間のフィールドワークの結果をもとに行っていく。

まずストラスブール市の世界遺産登録をめぐる動きについてみていく。ストラスブールのグランディルの世界遺産への登録は１９８８年のことであった。しかし当時作り上げられた文書は時がたつにつれ、ユネスコによって定められた規範にそぐわなくなってきてしまう。この状況下において、２００５年に出された定期報告書で特に問題とされたのは、顕著で普遍的価値として現在認められている歴史的一貫性は、19世紀と20世紀の遺産を考慮に入れなければ完全性においても真正性においても評価され得ないことであった。この問題を中心として、ストラスブール市は運営計画書の提出を余儀なくされている。

この状況を踏まえた上で、先行研究の問題点について分析する。ノイシュタットの価値に関する先行研究のうち、他の先行研究と異なる価値の分析を行ったのがEberhardt氏であった。彼女はノイシュタットを、観念的価値、技術的価値、美的価値、歴史的価値、連続的価値の5つに分けて分析する。この分析のうち特徴的なのが連続的価値である。この連続的価値は、ノイシュタットが、グランディルとの関係において、ストラスブールの連続的な風景の構成に含まれているというものである。ここで注目したいのが、連続的価値の語り手が主に市に関係する人物であるということである。加えて、前述の通り市は、遺産としての完全性、真正性を示すために、20世紀に作られた遺産を考慮にいれなければならなくなっていたという点をあわせ、論文では一つの推測をたてる。すなわち、特徴的なノイシュタットの連続性という価値は、現在登録されているグランディルのものも含めて、ストラスブールの世界遺産を運営するために市が見つけ出した言説なのではないかという推測である。

ここで、理論としてのフーコーの言説についてみていく。フーコーの言説に関わる議論を分析し、言説の定義付けを始めに行い、次いであるものごとが言説におかれることで力関係が生じること、言説に従い、権力が現

れるとともにこれが言説を増やし、強化することについて述べていく。そして権力の効果として同一化の効果があることを示した上で、ノイシュタットの世界遺産登録をめぐる意見に反対意見が生じないことについて、一つの仮説をたてる。それは、ノイシュタット、特にその連続的価値に関わる部分が市の政策により言説に置かれ、市の責任者及び市が抱える専門家によって、ノイシュタットに関わる言説は増やされ、強化され、そしてその力がノイシュタットをめぐる言説を個人として同一化していったからではないか。つまり、市の責任者や市の専門家によるノイシュタットに関わる言説が、市によって行われるディスカッション、説明会、教育の場を通して人々に伝わり、ノイシュタットの世界遺産登録への全員賛成という同一の意見、同一の流れを作り出しているのではないかと言う仮説である。

　続いて２０１５年1月28日から２０１５年3月16日のまでの間、フランス、ストラスブール市において行われたフィールドワークについて仮説を踏まえた分析を行う。仮説の検証にあたり、論文はインタビューのうち市のプロジェクト責任者であるCassaz氏、プロジェクトの研究に関わっていたEberhardt氏、Eberhardt氏の紹介でインタビューを行ったノイシュタットの住民のB氏の意見を取り上げている。まず、Cassaz氏のインタビューの内容から、グランディルからノイシュタットに向かう連続性に彼女が注目していること、市民調査や説明会を繰り返し行っていることを取り上げ、市が主体となって連続性の言説を住民へと伝え、影響を及ぼしている可能性について指摘する。続いて、Eberhardt氏の、住民のノイシュタットに対する無知や、議論や見学会によって住民にノイシュタットの価値を伝えているという話から、ノイシュタットについて知識のなかった住民にその価値を伝えている状況を見出す。そして最後に、B氏のインタビューにおいて、彼が自身の住んでいるノイシュタットの価値についてほとんど知らなかったという状況から、市の説明会によってその話に共感するようになる過程が明らかになったことで、仮説のように、少なくとも一部の住民において、連続性の言説が、説明会などを通じて伝わり、意見を同一化させていることを証明している。

　しかしながら、仮説にあわない２つの別の立場があることもインタビューによって明らかになっている。1つ目の立場は、遺産保護団体に所属するD氏とSociété des Amis du Vieux Strasbourg、略称ＡＶＳに所属するR氏へのインタビューにみられる。D氏はまず、ユネスコ世界遺産の拡大計画について、賛成であるが、ユネスコが保護を直接行わないことを危惧していた。市が短期の利益をとって土地の購入や建築に関わるプロモーターの提案を全て了承している問題を挙げ、プロモーターの動きを制限する必要があるという立場に立っている。また彼はノイシュタットの計画がプロモーターの活動の制限につながることを期待している。

　２つ目の立場はＡＶＳに所属しているＱ氏の意見にみられる。インタビューの中でQ氏はフランス人とアルザス人を明確に分けて語っており、中央、パリの権力に対する反対の立場に立っていた。その上で、ノイシュタットの拡大計画については、拡大計画が認められれば、地方の力を具体化し、地方の権力を訴えることができると賛成の立場に立つ。

　以上の、仮説とは異なる２つの意見を挙げたところで、ノイシュタットのプロジェクトに反対する意見が小さくなっている別の理由について言及する。それは反ドイツ感情の薄れである。反ドイツ感情は、第二次世界大戦のナチスによる占領の悪感情との混合によって生み出されたものである。この感情は１９５０年代のPalais du rhinの取壊し計画を後押しし、１９６０年代のノイシュタットを歴史的建造物に登録しようという運動を中止にした原因になるなど、ノイシュタットに対して少なからぬ影響を与えていた。しかしながら、インタビューを通じ、１９４５年から１９７０年頃までは存在したドイツへの悪感情は70年頃から世代が変わり、戦争の記憶

とともに薄れていったことが明らかになる。
続いて論文の目的の達成に迫る。それは先の結果の分析を踏まえ、次のようになる。
反ドイツの感情は世代の交代と共に薄れ、ノイシュタットの歴史を知らない、あるいはそれに関心がない住民が増える中で、新たにノイシュタットを世界遺産の範囲に含めようというプロジェクトが立ち上がる。このプロジェクトは、グランディルからノイシュタットへの連続的価値の言説を掲げる市によって、説明会や議論の場、教育の場を通じて住民に伝わっていき、住民の一部はこの言説を受け入れ、あるいは共感して市の立場と同化していく。また、独自の立場から遺産を保護しようとしていた人達も、プロモーターの開発に対抗できるというメリットからプロジェクトに賛同する。他にも、県の再編に危機感を感じていた人々も、アルザスのシンボルとして、国に地方の力を訴える手段としてプロジェクトに賛同していく。このような経緯を経て、ノイシュタットを世界遺産に加えるプロジェクトは、市、住民双方から歓迎され、進められる一連の大きな流れとなったのである。
本論の目的を明らかにしたところで、最後に、プロジェクトが成功し、ノイシュタットが世界遺産として認められた後に起こりうる2つの問題について、可能性として提示する。
一つは、プロモーターの抑止をしたいという立場から考えられる問題である。それはノイシュタットが世界遺産に登録されたとしても、その保護範囲内において、グランディル内での改築のようなプロモーターの活動を市が許してしまえば、プロモーターを抑えたいがゆえに計画に賛同していた人々は、市に反対していく可能性があるということである。
もう一つは、アルザスの力を示すシンボルとしてノイシュタットを世界遺産に登録したいと考える立場からの問題である。市が現在世界遺産としてのストラスブール、その歴史的一貫性を示すためのグランディルとノイシュタットの連続性に重点を置いている以上、市の対応は不透明であるため、場合によってはノイシュタットのあり方をめぐる対立が起こる可能性がある。
このように、現在ほぼ全ての住民に受け入れられているノイシュタットへの世界遺産登録範囲拡大プロジェクトであるが、その中にはいくつかの問題の種が潜んでいる可能性がある。短い調査期間であったために、明確に問題になると示すことはできないが、ノイシュタットのプロジェクトをめぐる今後の問題となりうる一つの可能性として、論文の最後にこれらのことを提示しておく。